

まんだら通信

第226号 (通巻261号)

平成27年04月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



ルンビニ

外国旅行など思いも寄らない四〇年近く前、一生に一度の思いで、お釈迦さまの国インドと、スリランカに行きました。

二週間の費用は、たしか三〇四〇万円、今よりはるかに手元不如意が当たり前の私には、大変な金額でした。噂に聞いた集落の人たちが、少しずつ集めたお餞別を届けてくれて、感激した覚えがあります。

今から二五八一年前の四月八日、現在のネパールのインド国境近くにあった、カピラバストウという小さな国の王子として、お釈迦さまはお生まれになりました。お母様マハーマーヤー夫人が里帰りの途中、にわかにな産気づいて王家の花園ルンビニ園でお休みになったとき、右脇からお生まれになったと伝えられます。

るために前後一六年をかけて、インドのナールンダ大学などで修行して帰国した玄奘三蔵の『大唐西域記』に、「そこには多くの僧坊と、お生まれになったブツダを祀るマヤ堂があり、インドを初めて統一したアシヨカ大王が建てた石柱があるが、その石柱は落雷のために倒れて横たわっている。」と詳しく書かれているのだそうです。しかし地図の上でそれがどこなのか、長い間わからなかったのですが、百年少し前に、フューラーという学者さんがその場所を突き止めました。

倒れた石柱（緻密な砂岩を磨き上げたもので、高さ十五メートルぐらい。二千年以上前のものと思えないほどで、一抱えはあります。）の根元に刻んである古代文字を解読したところ「アシヨカ王は、即位二十年を経て自らここに来たり、親しく参拝した。ここでブツダが誕生せられたからである。それを記念して村の租税を八分の一に減ずる。」とあるそうです。

当時、この辺りは鬱蒼としたジャングルだったそうです。

左の写真はその全景で、手前に僧坊跡の煉瓦が見え、菩提樹の左側にマヤ堂があります。右の写真は、ひととき大きな生母マヤ夫人と侍女たちと、光背を背にしたお釈迦さまです。

最初の巡拝から帰国して、ささやかなお礼と報告のため、画用紙に写真を貼って、二〇部ほどを皆さんにお配りしましたが、上の写真はその時のものです。その後、原画が行方不明になり、当時を偲ぶものは、パソコンの中のこの写真だけになりました。

その間に、この場所はユネスコの世界文化遺産の指定を受け、風化を防ぐためか、バカでかい、無機質な体育館のような建物にすっぽりと覆われました。

同時に物見遊山の人が世界中から押し寄せ、右の写真の石像は似ても似つかぬ像にかわり、ネパールの人には叱られるでしょうが、とても落ち着いてお参りする雰囲気ではなくなりました。

両陛下 パラオ共和国へ

今日四月八日、両陛下には太平洋戦争戦没者の慰霊のため、パラオ共和国へ出発されました。敗戦まで委任統治領だった南洋諸島に含まれ、国旗は日本の日の丸の背景を青に、中の円を黄色で表すことから分かるように、大の親日国です。

今でもお年寄りが、君が代や童謡を歌えることから分かるように、島の人たちに優しい統治だったかが分かります。

最大の激戦地、ペリリュー島では守備隊の殆ど一万人が戦死しながら、七十日以上持ちこたえ「サクラ・サクラ」と打電し玉砕したといわれます。

平成六年九月二十三日、パラオ共和国は日米両国を招いて、日本軍の果敢な戦闘ぶりに感銘した、アメリカ太平洋艦隊司令長官C・Wニミッツ元帥の「諸国から訪れる旅人たちが、この島を守るために、日本軍人がいかに勇敢な愛国心を持って戦い、そして玉砕したかを伝えられよ。」という詩碑をペリリュー神社（南興神社）境内に建てて式典を行ったということ。

第一一話 ヒロちゃん

「春の海 ひねもすのたり のたりかな」なんて俳句がありますが、先日、宮崎の日南海岸で実際に春の海を見てまいりました。いいですねえ、南国の海。なんだか、穏やかで。水面がキラキラ光って。

でも、近くの駐車場に突然、バスが降りましてね、たくさんのおばあちゃんがバスを降りてきたんです。そして、一斉に海岸に向かって早足で歩き出したんですね。

何かあったのかと思って、戻ってきたひとりのおばあちゃんに聞きました。「どうしたんですか、お年寄りが団体で」

「あなた、気がつかないの。春の海が呼んでるのよ、私たちを。パッチヤーン、パッチヤーンって」……

今日は、宮崎のあるお年寄りからお聞きしたお話を紹介しましょう。

主人公は、細見茂子さん。宮崎市内の細見クリニックの院長先生、細見潤さんのお母様です。大正九年のお生まれですから、今年の五月でなんと九十五歳になられます。

でも、大変にお元気で、きれいなお着物を召され、明るい声で、先生の家を訪れた私に、こんな昔話をしてくれました。

あのね、私のすぐ下の弟に達宏という子があつたの。ヒロちゃんと呼んでたのね。この子はとても器量よしでね、目が大きくて、まつげが長くてね、近所のおばちゃんたちにとてもかわいがられてたのね。

私が小学生の頃、ひとりでお友だちの家に遊びに行くでしょ。そうすると、友だちのお母さんが必ず言うの。「あれ、茂子ちゃん、ひとり？ヒロちゃん、連れてくればよかつたのに」って。どこの家に行つても、「あれ、ヒロちゃんは？」って。そう、ヒロちゃん、すごい人気なの。あんまり言われるんで悔しくて、家に戻つて、お父さんの懐に飛び込んで泣き叫んだことがあつたわ。「なんで、私はお父さんに似て、オヘチャなの！」って。父は困つてねえ、「茂子もかわいいよ、すこくかわいいよ」って。

私が見ても、ヒロちゃんはたしかにかわいかつたわ。男の子のくせに、女の子のような顔だつたもの。ヒロちゃんは、性格もやさしい子でね、「お姉ちゃん、お姉ちゃん」って、小さい時から私のそばを離れなかつたわ。

茂子さんは遠くの景色を見るように、目を細めながら、ヒロちゃんの話続けました。茂子さんの家は、宮崎市内の当時の繁華街で大きなお菓子屋さんを営んでいました。森永や明治、グリコなどの卸売りもやっていた

し、自ら工場も経営していましたから、宮崎を代表する菓子商だつたようです。

そんな家に育つた茂子さんの大正末期から昭和のはじめの、茂子さんがまだ幼い頃の話。

私が感動したのは、ヒロちゃんといつしよに見た蒸気機関車の話です。

茂子ちゃんを通う尋常小学校の裏手は、当時、すべて田んぼでした。それはそうでしょうねえ、いまから九十年近くも前のことですから。そして、その田んぼの真ん中を日豊本線の線路が延び、その上をシユツポ、シユツポと蒸気機関車が走つていったそうです。

茂子ちゃんは、その機関車が走る姿を見たくて、姉やに連れられて、ヒロちゃんと手をつないで線路の近くまで行つたそうです。折からの夕焼けのなかを、蒸気機関車が走つていきます。「ポツポツ」。紺の着物を着たふたりの子供に合図をするように、機関車が勢よく煙を吐きながら通過していったと言います。

「へえ、真つ赤な夕焼けのなかを蒸気機関車が走るんだ」と私が言うと、茂子さん、大きく首を振りました。「真つ赤じゃないですよ。きれいな、みかん色ですよ」

みかん色の夕焼け、茂子さんの脳裏に浮かぶ鮮やかな記憶に、私は何も言えませんでした。お年寄りの思い出は、実にカラフルで繊細なのです。

茂子さんのヒロちゃんの思い出は続きました。「ヒロちゃんがね……」、「ヒロちゃんはね……」、「ヒロちゃんね……」。茂子さんには、まだほかに弟がふたり、妹がひとりいました。でも、あまりにも、ヒロちゃんの話ばかりが続くので、よほど、仲がよかつたのだと思いましたが、あるところで、ヒロちゃんの話はプツツと止まってしまいました。

ヒロちゃんが、出征したからです。茂子さんの話を総合すると、戦争末期、南九州を代

表する菓子商、細見商店の長男、細見達宏さんは、都城第二十三連隊に入隊、中国に派遣されたものの、やがてニューギニア戦線へと転戦させられたそうです。

私は、このニューギニア戦線について調べてみました。すると、この戦いがいかにすさまじいものだつたか、すぐにわかりました。ニューギニアは日本から真南に五千キロ。オーストラリアの北側に位置する熱帯の島。いわば、ジャングル地帯。ここを攻略すればオーストラリアも攻められるし、何より、アメリカの太平洋への進出を止められるというので、日本軍は絶対に負けられない戦いをしたんだそうです。

しかし、すでに弾薬も食糧も尽き、もちろん後方からの支援もない。現地で物資の調達をしようにも、もともと人家や畑もない。そこへ連日の雨。兵士たちはヤモリやトカゲが手に入ればいいほうで、動員された二十万の日本軍兵士のうち、帰国したのは約一割の二万人、戦死者十八万人のほとんどが餓死だつたそうです。

運よく復員できた知人が、茂子さんにこう言つたそうです。

「ヒロちゃんは、お坊つちやんで目がきれいだから、トカゲも食えなかつた。何にも食べないから、葉っぱなら食べられるだろうと思つて、柔らかい葉を選んで揉んで与えたら『僕はいいから、君がお食べ』と言つてね、翌朝、見舞いに行つたら、青空を見つめるように、目をしっかりと開けて亡くなつていたんです。餓死でした」

別れ際に、茂子さんは、悲しい声で、私にこう言いました。

「ヒロちゃん、つらかつたね」

お年寄りは誰でも、いくつもの悲しみを抱いて生きていくということが改めてよくわかつた南国の春の昼下がりのできごとでした。



▼今月の野草は【シソ科キラソウ属】キラソウです。漢字で金瘡小草とか金襴草とありますが、何故そうなのかよく分かりません。もっと分からないのは、別名の『地獄の釜のフタ』です。インターネットには色々の解釈がありますが、どれもこじつけにもならぬ解釈ばかり。変な名前で、この野草には迷惑でしょうが、そんなことには我れ関せずでしょうね。花の大きさは3~5ミリ。日当たりのよい土手などに、地面に張り付くように、株が丸く育ちます。2015.04.08 龍渉

▼葉桜になり、鉢植えの日本サクラソウが咲き、野山の緑が少しづつ濃くなって、暖かい南風が吹き、ようやく春になったと喜んでいたら、どうですか、この数日の真冬並の寒さ。今週いっぱいはこのままとかで、やれやれのぬか喜びでした。▼先月の225号は、プリンタの不具合を直す時間がなく、やむを得ず印刷面が汚れたままをお届けして申し訳ありませんでした。一昨日、技術屋さんに来てくれて、古い部品をすべて取り換えてくれましたから、向こう1年は多分心配ないと思います。▼どういうわけか中国と韓国は、仇に巡り合ったように日本を悪く言います。尤もその発端は朝日新聞が根も葉もないことを、世界中に言いふらしたことなので、“盗人を捕らえてみれば”と同じで困るのですが、円安もあって日本に来る機会が多くなり、国で聞いている日本人とあべこべなので、逆に日本を好きになる人が多くなり、インターネットの発達で本当の情報が分かるようになり、中国や韓国の政府が言っていることの化けの皮が、だんだんとはがれてきているように見えます。▼先月号で、ハマダイコンを辛味大根に使えないかと書きました。試してみたら、思ったよりも辛くないのですが、水気が少なく充分使えると思いました。

余滴

